

谷

母

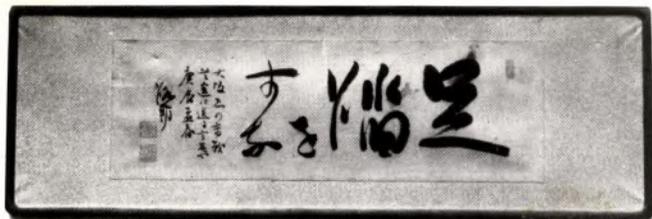




谷
町

大坂形水著

川柳塔社刊



故 麻生路郎先生筆の 足踏をすな を座右の銘とする著者

序

大坂形水さんが、句集「谷町」を刊行されることとなった。形水さんを囲む関係者として私は、双手を挙げて祝福の萬歳を唱えると同時に、なぜかしら、ホッとしたりと言うのが偽りのない気持であるように思われる。と言うのは、句集発刊を古稀記念にするのは早すぎるから、喜寿まで待つてというのが、形水さんの強い心組みであった。それを周囲の人達が待ちきれずに踏みきらせてしまった観があるからである。

「川柳塔社」四月初の常任理事会では、全員賛成、拍手拍手で見切り発車を決めた。こうした強引な採決の形で、句集刊行されるというのも、些か珍しい例であると思われるかも知れぬが、このことは、とりもなおさず、長い間形水さんの句集刊行を、みんなが待ち焦れて居た事の証左でもあり、又形水さんのお人柄が余りにも謙譲すぎて、かたくなな迄に、時期尚早の心持ちが形水さんの脳裡に根強く居坐っていることを周囲の人達が見抜いて、決断を迫ったというのである。一面にはまた、それ程迄に常日頃形水さんが、みんなから敬慕され、兄事さされている事にもつながるわけであると思う。従って「川柳塔」が、少々先きどり気味に誌上発表した題名「坂」が、「谷町」に改められた経緯もあっての上で、愈々ここに芽出度く「谷町」が誕生した次第である。私個人としても、何んとも

言えない心からなる慶びをどうすることも出来ない心境である。

形水さんと私との出会いは、相当昔のことで、はっきりした記憶も浮かんで来ないが、すくなくとも、私が医者になってから、即ち小児科の主治医として、患者の形水さんのお子たちをお世話するようになってからだから、かれこれ五十年の歳月が流れている。私が日本橋の松坂クラブで、路郎先生の講座に入門したが、昭和14年であるから、形水さんは路郎門下としては、かなり先輩であり、「川雑」誌上にも句の発表が続いていた。或る時、お宅の大坂さんと「川雑」の大坂さんは、同じ大坂さんですか、と形水さんの奥さんに珍妙な質問をした事を記憶している。当時は正一という号であったようであるが、いつ頃から形水と変ったのかは、私にはさだかではないが、おふくろに背中を流してもらった子供の頃の行水を想い、形水にしたと、ご本人が、「雅号ぶっちゃけばなし」に書いて居られる。

小児科医者というものは、現在でもそうであるが、昔は特に、父親よりも、母親なり家族の者との親しみが深く、所謂、家庭医として家族ぐるみのおつきあいになり、奥さんやお祖母さんやともころやすく親族気分になり、従って、がさつ者の私のことだから、無躰な非礼な点が多かったことと、今にして思うことがある。しかし、それだけに、家族の方の性格なり、氣立てなり、根性なりとかいうところまで、知りつくすようになり、その点では、古くから、柳人としての「形水」、父親としての「形水」、夫としての「形水」と、形水さんの人間像を比較的正確に、且つ捕え易い立場に私はあったわけである。

その形水さんは、先きにも述べたとおり、かたくなな迄に謙讓で控え目であるが、その反面強固な意志と、あたたかな抱擁力、格調高い愛情の持主であることは、一人私だけでなく、形水さんを識るすべての人が抱く同じ思いである。特に私が畏敬する面は鋭い批判力を磨きすまして常に頭の一隅に備えていることである。そうしてそれは、そのまま、誰にでも敬愛され、誰れにでも信頼されるのであるから実に尊い。こうした人柄が、何のつくらうとくもなく、生活の記録としてそのまま句にあらわれ、それを集めたのが、このたびの句集「谷町」である。世の中の読む人すべてに、ほのぼのとした名月の影を投げかけずにはおかぬと思う。時には読む人の無二の友として、時には力強い心の支えとしての「谷町」は、必ずや、皆さんの机辺を永く離れないことでしょう。可愛いがつて下さい。

昭和五十三年五月

於 川柳塔社

川柳塔社主幹

中 島 生 々 庵

男……………(171)

遊び釘……………(193)

家庭……………(211)

自画像……………(229)

跋……………藤村青一…(253)

編集のお手伝い…
をして……………不二田二三夫…(257)

あとがき……………大坂形水…(260)

足踏をすな（戦前の作品）

— 川柳雑誌・昭和九年〜昭和十七年

少年時代を憶う

谷町は丁稚車にきつい坂

灯を消せば潤一郎の気ともなり

姿勢よく歩く背広は釦かけ

洗面器の向うへピョイと蛙逃げ

別荘の機械体操錆びたまま

子の笑顔またピンボケになっている

パジャマ着た妹
蛸のように寝る

子の病氣信心のない所為にされ

身体の異常聞かされる蚊帳の中

草取りの一人 田を出て添乳する

車窓暖か ここは明石のお舟がたんと

母の手から俺へ抱っこの手を出した

初節句本尊さんは昼寝中

膝の子へよその母ちゃんつりこまれ

歯が生えた熱でよかった医者入門

良い医者にかかれぬところへ家を建て

本能は手の届くところみな破り

自宅でも診ます　どてらのまま診ます

ランドセル菜の花道を馳けてくる

一家団欒の後 芝生に新聞紙など

蜥蜴の恋　光り二つになりて逃げ

処女作（昭和九年）

昼のサイレン　歯ブラシくわえたシユミーズの女

その眼差し　男の嘘を探りおる

修身を抜け出た婿だ親が惚れ

良い息子さんの月給聞かされる

来る度に何か残してゆく男

鳥打ちの○どんだった僕だった
思い出出

いとま乞いご寮人さんが酌いでくれ

気ままの数々 主家の古天井

開戦の報に風邪引きすつ飛べり

日米開戦

正月のプランけしからん温泉地

歓送へ馬の下から旗を振る

バ
ッ
ト
も
み
消
し
師
走
の
火
鉢
立
ち
上
が
り

戦
時
に
は
戦
時
の
色
で
儲
け
て
る

ご
苦
勞
さ
ん
夜
警
の
廻
る
靴
の
音

居なくなれば取り得のあつた男なり

汽車の窓工場へ黒き列続く

満員車 足を踏まれた声がる

時代相案山子の着てるアッパッパ

お百姓笑いもせずに案山子立て

卸屋でわけて貰って地味すぎる

大阪の路地は汚れた雨が降る

終電車乗り越しらしい眼で訊かれ

結納の百円札へ火熨斗をあて

中座・忠臣蔵を見る（一句）

此頃の色彩も混ぜてゐる新駒家

せめてもの友へ新刊差し入れす

兄貴分と云う兵児帯の巾を見せ

先輩も同じ訛りで会うてくれ

外交の名刺一瞥されただけ

壺の百合 開かぬままに萎れたり

当然のように老人席へかけ

老船員　心齋橋の昼歩く

傷兵の妻が汗ばの子を背負い

菜の花に笑いはじめた子を抱いて

頬つけば笑顔を見せる百日目

泣きやまぬ子を抱いて出る午前二時

昼飯をよばれる傍へ猫が来る

下駄 半ズボン 夏凌ぎよい銃後

冷蔵庫欲しが
るままに盆も過ぎ

南京陥落 怪しからん株成金

売れる売れるたらい回しになる砂糖か

因縁をつけられそうな街歩く

大坂のパン売り切れた水見舞

水退かぬ窓へピアノが流れて来

水害の駅から今日も応召兵

非常口がらくた物の置き場にし

エスカレーター
ストッキングが上に立ち

ふる里は海辺づたいをバスに揺れ

萬の付く儲け電車で話してた

統制下 親父「改造」などを読み

儲け口の話 断りニュース聴く

ず
っ
し
り
と
稲
の
重
さ
を
娘
が
擔
ぎ

肥
擔
ぐ
腰
の
力
が
あ
る
日
本

子の落ちた音に心臓止ったり

玩具買うほどの配当取ってくる

子の咳に妻の不安な眼と出合い

夫への不満
バタバタ
掃除する

意志弱い男へ
寝間が温うなり

蛞蝓も塩も
溶けてる流し元

衿立てて師走の雨の中走る

そこここにたら腹食えぬを不足がり

書き物と首っ引きして商いす

新緑も知らずバタバタするばかり

掃除するだけに女中が四・五人も

干雑魚をご寮さんもつまんでみ

今の世に焼松茸もふぐちりも

顔見せぬ友は古典を究めいるとか

どの分がどれか ややこし貯金帳

遊ぶ子の一人　下駄ちびていていとし

二階から腕白ぶりを見ていたり

癒　　つたら連れて行くところたんとでき

酔
う
て
い
る
帽
子

桜
の
枝
を
さ
し

浜
は
夕
風
タ
ン
タ
ン
タ
ン
タ
ン
タ
ン
舟
帰
る

戦地の兄と弟へ

氏神へ詣らぬ日なく母達者

自愛せよ捧げまつらん身命ぞ

芋のこと米のこと常会終りたり

プラットの御霊にすまぬ車窓越し

幼な友噫乎忠魂の碑となれり

クリーニング鉤かからぬ服となり

父ちゃんが押す乳母車二人乗り

子が昼寝わが家陽が入る一と間あり

子を預けほつと頼りない夕餉

日曜日犬と並んだ日向ぼこ

宵戎マントの釦ちぎれて来

出張も一寸仏印までとなりまつせ

車窓暖かチルチルミチル顔並べ

谷
町

創業三十周年

倒されたのも思い出の三十周年

三十周年不渡り手形の束ができ

デザイナーの或る日遊びの鋏持つ

健康法の一つに社長早出する

秋物の売れ行き残暑に狂わされ

太らして置いて横取りするつもり

儲ければよい根性の頭打ち

どさくさによその領土へ旗を立て

オープンへさくらの役を買って出る

受付けの機転 社長を留守にする

コンピューター レジヤー産業買えと出た

因習の屋根の重みに耐えている

こんどこそ待ったの言えぬ日が迫まる

麻タッチ真似てテトロン値上げする

焦げつきも利益科目へ入れられる

北浜へ既に流れていたニユース

妙な色流は行やり玄人戸惑えり

企画部へ社長の体験邪魔になり

横顔に打算の色があらさま

コンピューター持って商機を取り逃がし

ちよつとばかり儲け人生観変り

カルメラに似た経済の膨れよう

ルンペンの服からヒント得たモード

小企業にゲリラ戦法という手あり

秒単位で動く社長のエネルギー

見通しの暗い今年へ賭けてみる

企画部も情報過剰に戸惑えり

内幕は敵も苦しい筈と見る

横文字を外す自信のないメーカー

業界紙のコラム 曲者潜んでる

黒字倒産他人ごととは思われず

院政の睨みをきかす元社長

棒折って戻り会社を悪く云う

責任をうやむやにするポスト替え

川上と長嶋の違い聴くゼミナー

正義派を自認している総会屋

ドル増える狸の木の葉とも知らず

暑中広告でボーナスを出す業界紙

抜け道がない筈がない知らぬだけ

堂々とキズ物にして横流し

債権者会議で小口は怒鳴るだけ

そう云えば腰低くなつた商社マン

同業の噂 場違い筋で聞く

偽装倒産二、三の先きには話してる

糸へんの王様 食べもの屋を始め

顧客今日 商売外の用で来る

丁稚した足腰不況向きにでき

暴落へ玄人遠うに逃げている

結局は貸した弱身の妥協点

成立へ過去を流した手を握る

倉庫から倉庫へ動くたび騰る

面接日 玄関ちよつと飾つとく

合併をされ先代の額降ろす

妙なのが味方の中に動いてる

つつこみで仕入れ大中小で売り

云うてみるもの銀行が金利まけ

合併の名でライバルに吸収され

スーパーへ出さぬ権威を持つマーク

そろばんをはじめいた上の明け渡し

デパートのデザイン盗りに行くカメラ

銀行がのれんをかたにした時代

同業が格差を見せるビルを建て

あべこべの値札のまままで出てしまい

ライバルの情報　ブローカー持ってくる

禿鷹の餌食になった倒産社

雜
(A)

お隣りの訃で温泉は中止する

こじんまり商う店ある古都の路地

バーベキュー生駒山上の灯が近い

大正の頃がよかつた『横堀川』

出欠のハガキぎりぎりまで迷い

右折れのきかぬ通りへ出てしまい

一喝をするに適した日本語

ベストセラー頭よくなる本が売れ

柳友も真つすぐ帰る齡ばかり

裏芸の方は負けない浴衣会

モーニング着て私を不在にし

昼飯を断わり切れず乗り遅れ

この辺を歩きたいのに見送られ

何処さんも悩みごと持つものと知る

案外に自分知ってる自己評定

戦争ニユースそんな国あつたのか

万博で本場のコーヒー飲んでみる

隠居先き訪えば外遊中とかや

清水白柳さん逝く(二句)
旅のどこ歩いているかベレー帽

愚痴聴いてくれる白柳さん居ない

船場からまた名門が一つ消え

電話では断われそう手紙書く

うつらうつら電話が鳴っている昼寝

東京はわけの分らぬ金動く

割り勘で行くところでない銀座裏

晩の街歩ける日本有難い

ハンデイの上るカードを出そとせず

さりげなく一矢報いている後記

検閲の厳しい頃の初版持つ

耳鳴りが聞こえパットの手が狂い

心配をさすことばかり云うて来る

ナイロンの葉でもみのうなったさくら餅

ランチタイムの廊下ピンポン球が跳ね

上段は飾り用です洋酒棚

近所まで来て迷ってるらしい電話

キヤデイから見た大臣の腕のほど

だと云って今の野党でどうだかね

指名委員のニタツとした顔目に見える

正面にやすやす這入れる隙がある

恐い例聞いて病気が恐くなり

対談で言わずもがなのことを言い

朝刊の明るい活字 死亡^{ゼロ}0

肩書は多いがどれも副ばかり

ダイヤルへ老眼鏡要る齢になり

随筆が好きで文芸春秋読む

随筆の大臣 話せるところがある

絵の方に近い前衛書道展

メニユーにないものを出す顔なじみ

五・六番どころを走るマイペース

気心を知ってる祝い 金にする

水切れているのか造花でない花瓶

一枚の白紙の重み噛みしめる

単行本になると鋭さないコラム

雜

(B)

亀勝つた現代版というハナシ

清流の魚に昼寝の場所がない

秋
壁に蚊のしみ残ってる

蛇が皮残して秋へ姿消す

蟬の声耳からとれぬノイローゼ

粗相した犬悪びれた目を向ける

番犬の鎖 今にもちぎれそう

捨て犬が野生になった声で吠え

ファッションにおいてけぼりにされる亀

勝ちながら亀の人気は今ひとつ

産まれたての仔馬みごとに立って見せ

残暑なお犬も御飯を食べ残す

置き去りの犬が居づいている港

飼いだの哀れ晴れ間も繋がれて

手の届くところに
蕾を付けた枝

屋根よりも高く飛べない
寺の鳩

雜
(C)

咳ばらいすると黙った襖越し

追加分有志負担でけりがつき

東京から寛美へもらいかかりすぎ

真つすぐな声に一瞬座が白け

宗教におどしがあつて抜けられぬ

法律に触れていないと見得を切り

砂浜のガラス背筋が寒うなる

ち
よ
ろ
ち
よ
ろ
ち
よ
ろ
水音聞える坐禪

花開く音を聴いたと云う坐禪

雑談のうかつ録音されていた

スピーチの順へ背広の釦かけ

エープリルフールだったかアツハツハ

餅を焼く匂いに二階降りてくる

仕組まれた事件を語る生き残り

突っ放す言葉の裏に気がつかず

会長の或る日 夫婦の仲裁に

悪筆もサインは金になる字書く

紙礫既にくさは始まつてる

虫のよい話へストーリー泡立てる

赤
ち
ゃ
ん
が
突
如
気
持
ち
の
良
い
お
な
ら

名
門
校
親
に
た
て
つ
く
子
に
育
ち

それぞれに巣立ちおとんぼだけ残り

球探す　　ここらこんなにならび伸び

サンダルの片方に持ってかれ

冷房に勤めて合のズボン下

踊りの輪夕立ちぐらいかまわない

一円貨の要る商売でよく儲け

うちの子が先頭を行く鼓笛隊

うかつにも子にくずかごを教えられた

飛び出した子へブレーキ間に合った

銘のある方の壺出し松を活け

天井に煤けて福笹ぶら下がり

クーラーの部屋で西瓜が水っぽい

別荘に子供が居ないすべりんこ

幸福なカップル赤ちゃん見せに来る

新市街駅の改札裏へ出来

民放のようだとNHK言われ

退める者退めてすつきりした社内

見せかけの善意にしてもできぬこと

大臣が出て田舎には過ぎた橋

銀行も警戒をするゴルフやけ

カラオケで歌うに靴を光らせて

人気歌手バックの力忘れかけ

拒絶する身振りにしては艶めかし

消印は意外市の中にかくれてる

寝転んだまま新聞を足で取り

正月を逃避ホテルをとつてある

正月のフィナーレになる戎さん

何んとなく今年おお事起こりそう

出世して故郷へレジャー持ってくる

世話好きの手柄知事さん呼んでくる

海賊を先祖に持っている自慢

気の利いたのもたまにある記念品

しくまれたものかも知れぬハプニング

毛語録読みマンガ読み火炎ビン

どっちでもよいから古顔立てておく

アルファーがあることにして折れておく

失敗のしぶりが良うて見込まれる

生活のかかったプロの仕ぐさ真似

禁煙でつい鼻いらうクセがつき

今置いていった名刺を栞にす

齢ばれて老人組へ入れられる

とつときの名言先きの人が言い

恥かいて来いと新参励まされ

謎
め
い
た
言
葉
戻
っ
て
か
ら
気
付
き

春
の
草
踏
み
た
く
ズ
ツ
ク
の
靴
を
履
く

強いので天候までが味方する

お車代渡して試食してもらい

未来図の先き取りをして行き詰まり

雑念の向うにチカツと光るもの

司会者も顔負け花嫁歌い出す

期待するノックも無うて一人寝る

蟻の道辿ると柱いかれてる

担保ない者は借れない救済金

ゴチャヤゴチャとした街に住む顔馴染み

決心のつかないままに岸離れ

ヘルメット要る見学に身が緊まる

大臣の福祉云々聞き飽きる

骨組のどの一本にもあるいのち

衿元の汚れわたしが笑われる

平均寿命延び病院が不足する

公平である新聞の左寄り

歩く足間近に見える喫茶店

暇な眼に他人のあらが見えすぎる

子供の絵大人のウソを突いている

海を見ていて許す心になってくる

秒争う手術へ白衣慌わてない

戦中もの人気に梅干関係ない

売名家 金生かすすべ知っている

朝顔の咲くを知らない夜行性

貿易の黒字家計につながらぬ

恩師からの手紙そのまま遺書となり

掘り出しの本を奥から呼んでくれ

日の丸を忘れた街を見る銅像

風邪でない工場街に住むマスク

もらうもの貰い他人になる拇印

躊躇せずポストへ入れる返事ノ

下宿屋も当てにしている書留便

鍵かけてがらり無頼の声となる

どっちでもよいから白紙委任状

格子戸を開けると奥でベルがなる

堂々と表門から来る詐欺師

河汚れ河童引っ越し考える

菟旗持った先祖の血が流れ

地図持って団地の中を迷ってる

トランクの古い型持つ旅芸人

ハンカチでそつと西瓜の雫拭く

決裂のテーブルスプーン落ちた音

大物になればカメラに顔伏せぬ

縮むのを考え上のサイズ買う

荒神さんのお札が湯気にゆれている

川の水見ながら別れ話する

鉢植えのアロエが売れる医者不信

カーテンで敷きっぱなしの部屋かくす

広告の虜になった常備薬

焚火する傍へだんどり持ってくる

友達の膳の残りも折に詰め

門松の豪華さすがにパチンコ屋

菜種花咲いててつちり閑になり

無意識に格好悪いところをかき

スリッパの乱れへ社長の目が光る

スペツシャルルームで鴨にされており

官庁の支払い順に並ばせる

玄関を出て一と言が気にかかる

お隣りは目かくし用の植木植え

ダンヒルへ恐縮をするハイライト

独身寮洗濯の紐張ったまま

見ていると絵の鳥獣がしゃべり出す

何をする本部かいつも閉まってる

口銭を不労所得のように言い

うどんから比べコーヒーの馬鹿らしさ

下請けに支えられてる世界二位

まだ話すつもり拍手で打ち切られ

日ソ交渉鮭の切り身が小さくなり

決心がつきダイヤルへ指を入れ

友情を無にし消息絶つたまま

言わずもがなことを結びにふくませる

サンダルに地下の階段長すぎる

グループの一人テレビに出た自慢

カーテンを楯にアカンベして見せる

ホステスの食欲たこ焼き忙しい

評判のカレーを食べに行く地下街

巳さんのお姿見たと月詣り

雑踏に居ても淋しさつきまとい

島へ行く船はペンキの臭う部屋

亡き人を汚がす云いわけ引っ込める

ツールランドの咎め齡をも考えず

旅

淡路島・静御前の墓

二 説ある墓觀光に浮かび出る

淡路島・文学碑の森

土 方した韓国詩人の文学碑

馳け足世界一周

税関を通ると日本でないロビー

ぞつとする処刑具遺るロンドン塔

べらぼうに昼間の長いヨーロッパ

やましきなどさらさらにならないヌードシヨウ

土産物買うモレッツき日本人

高所恐怖ロープウェイの三十分

モンブラン観光

手の届くところに威容のモンブラン

目を潰す反射カメラも用なさず

無重力を歩く思いのモンブラン

外人の組とカンパイ叫び合い

ドン鳴った頃懐しい城下町

帰途コース東京回わりとゴルフ組

ひとり来てひとりで惜しい景に佇ち

ふと家へ電話してみる胸騒ぎ

会って見たいひと居る駅へ下りてみる

帰郷してなるほど若いのに逢わず

温泉に泊って足の爪を切る

寺巡りなどして涙もろくなり

ふと夫婦西国巡礼思い立ち

お互いに帰りは別な乗車券

棹させばとどく佐渡とは唄のこと

一っ時を姿くられます旅に出る

新幹線開通

晩飯に來いと岡山から電話

室生寺

杉の木の高さが塔を小さく見せ

大阪の穴場博多で聞いてくる

滝に佇ち人間小さいものと知る

一泊の旅に着るものどれにしよう

坂のある街を歩くと汽笛鳴る

隣室は今頃バスを使う音

網棚のかばん気安う取ってくれ

振り切った拍子に宿の下駄切れる

朝霧の中から塔が現われる

外人に声かけられる城下町

解散の京都でそれぞれ行くところ

男

そう云えば經理に多い胃潰瘍

共産党ファンの社長と酒を酌み

近所まで来てゐる電話に呼び出され

潰れる先きばかり巡つてきた履歴

北浜にくすぶつたまま男老け

男気の仕末免許証かたに置き

ゴルフ狂不渡りを出す羽目になり

ここという時に一発出るキャリア

立小便するところがある裏通り

酒飲まぬ男の渡ってきた世界

二、三軒過ぎて素通り振り返る

ク
ー
ラ
ー
の
野
暮
川
風
の
窓
を
閉
め

法
螺
ぐ
ら
い
吹
け
る
男
に
な
り
給
え

盃
を
持
っ
て
席
順
詫
び
に
く
る

居残りの机へうどん運ばれる

職場でのきびしい顔を妻知らず

ホラ吹きのおやがえらい奴になり

下っぱは下っぱなりの判を持ち

役員の一人数字がよく分り

偉い人だったが何か欠けていた

人生を中途半ばにした文才

麻雀屋始めまあまあ食べてます

裏切った男銚子を並べてる

帰省したまま工場へ戻らない

排気ガスぐらいで大阪を出とうない

家を持つだけの望みとは淋し

前借りをして職人年を越し

暫くは傍観してる実力者

留守の筈ない昼下り電話出ぬ

天井の蠅を見ている独り者

宴会の酒豪うちでは直ぐに酔い

チャランポラな男でチャランポラが通り

不気味さがちらりボスの大阪弁

尊大な男の隣り空いている

正面に拍手せぬのが一人居る

公園の横へ眠りに来るトラック

雑音にされる働く者の声

意外ではないユーモア作家の胃潰瘍

でかい靴履いてる男のコンプレックス

珍らしい姓ですなあと初対面

栄転にしても家族を置いたまま

嫁貰う齡して大嘗またダブリ

蒸発をして四、五日を有馬に居

大晦日おとこ蛍光灯の傘を拭く

断われぬ顔立てておく顧問料

連れがなくエマニエル夫人見ずじまい

いささかの株持っているドル不安

この道を一筋に来た顔のしわ

読み違いされた名刺のまま通り

平社員当時の写真肥えている

謹慎へトレードマークの髭落とす

上座では困る男に坐られる

老僧の気骨由緒の杉護る

退屈な男謀反を考える

世渡りのひよつとこの面を持っている

上客になって女を抜きにくる

血圧の低い男へ橋揺れる

低音に男ごころをにじませる

日曜だ
タートル
ネットク
で出掛けよう

遊
び
鉤

宝石を胸に廃人のくらしする

これはこれは奥さんにスリッパ揃えられ

社長夫人会社の危機を知らない

ホステスへサルトルがどうのこうのとか

婚礼のトラックと逢う良い予感

パジャマ着ると女逆立ちしたくなる

チンピラのグループ女王蜂がいる

酒酌いで女 昨日を許してる

幻の女を 女憎んでる

かかる時女きようだいなればこそ

主婦連にマンモス企業ゆすぶられ

ゴ—ゴ—の女 獣の声を上げ

応接へ通した婦人は保険なり

良いお湯でしたとタオルを巻いたまま

どっちにもとれるヒントを出す女

トイレ紙を買う行列とは呆れ

雨の多いドラマ 女はからだ売る

喧嘩して女夜食が欲しくなり

スリッパのままエレベーターまで送り

女の子にカバンを持たせ漫画だね

一流のプロを子に持つキャディさん

友達の細君近頃わかかわかしい

全身がバネになつてる女子バレー

割り勘をその場で出し合う女学生

家元をワキ役にする晴れ舞台

ドアの鍵かけると個室猟奇めき

冷房がないからやめるお手伝い

パジャマ着た女へすでに陽が高い

表まで出てきて家を指してくれ

サングラスの女とまた逢うドライブ

美智子妃と同じデザイン仮縫し

スカートが縫える程度の洋裁出

洋裁へ行かせて欲しいお手伝い

遊び釘一つで生きる婦人服

奥さんに似てペット神経質

カーテンが動いてオーデコロン匂う

お茶漬が出て三味線も仕舞いかけ

妓ちゃんを楯にいやいやする舞妓

足元へお師匠はんの目が光る

末席の手酌へ妓知らん顔

ホステスの過去そこいらにある話

男馴れしたウイットをちらつかせ

袋帯解いてお茶漬け欲しくなり

ついでにいる男の逆へ賭けてみる

ご婦人の汗は静かに押えられ

さて何の先生かマダムも知ってない

叱られた後で奥さん酌いでくれ

仲居さんピッチャーの型でみかん投げ

家
庭

孫が来て角のあるもの片づけ

よくも用あるもの老妻動きずめ

娘死去(昭和46・2・4)

天国へお嫁に行つたのだよきつと

手を握り返してきそう握つててやる

好きだった着物を皆で着せてやり

ご先祖へ一人で往く娘のこと頼む

夫婦だけになり食台が大きすぎ

ふと妻の涙を溜めた眼と出合い

またしても亡き娘の物を見てる妻

娘の三回忌

戒名にまだ馴染めてない三回忌

遺品まだそのままにしてる三回忌

命日を知ってくれてたお友達

亡き娘を想う

贅沢も知らずに逝った貯金帳

思い出はみな笑つて顔ばかり

自分らもいずれはゆくと新仏壇

帰郷して

彼岸花咲いて墓参を思い立ち

嫁を連れ海を渡って行く墓参

妻入院手術

手術終えし医師の姿が大きく見え

粥一つ食べて看護をホッとさせ

快復のうれしさ便所まで歩け

市外通話の向うに孫の声とする

ほのぼのと包帯とつた子と歩く

父の日の父は孫らに疲れきり

お隣りを恐縮させる掃除好き

夫婦にだけ分る合図の押し釘

梅漬ける妻の助手する日曜日

起
こ
す
ま
で
朝
を
起
き
な
い
娘
が
は
た
ち

孫
の
顔
見
に
東
京
行
き
の
用
つ
く
る

塔
に
佇
ち
夫
婦
の
思
う
こ
と
同
じ

出迎えた家内良いことあった顔

イレブンの途中で妻は寝てしまい

カーテンの汚れに気付く風邪の妻

新築のトイレへちよつと入ってみ

新築はどの窓からも陽が入り

長男手術

万
一のことが浮んで居たたまらず

母^お親^やとしてただ出来ること百度石

電話ベル ドキツと妻の眼も怖え

祈る気でガスの出るのを待つ看護

まこと天使に見える看護婦さん

落の皮むいてる妻の手が無心

赤ちゃんのシッコが飛んだ初笑い

なかなか去にそうでない笑い声

子の風船きれいな空へ放たれる

どの絵にも亡き子が出てる走馬灯

ベランダで食べ用ほどのトマト生り

箸紙も夫婦と末っ娘だけに減り

自画像

ワ
ン
マ
ン
に
な
れ
ぬ
血
液
型
で
あ
る

黙
つ
て
酌
ぎ
黙
つ
て
飲
ん
で
父
と
子

老
眼
鏡
忘
れ
車
を
引
つ
返
す

退っ引のならぬ出番へ袴はく

「雪国」の初版誰かに貸したまま

松茸の東京送りの値にあきれ

新幹線開通

岡山の奥買つとけと土地のこと

京阪で顔見世行きと乗り合わせ

こっそりと無芸手品を習い出す

ここのところ喪服着て出ること続く

役得の立場へ自分を置いてみる

押し釘どこへ付けよか非常ベル

ふと去年の今日の日記を開けて見る

空いている方の寿司屋を通り越す

春の叙勲にどうかと思う大臣名

広告が当ての取材と知らず会い

堅い男の堅いゴルフに兜ぬぐ

胃を切った話を聞いて胃がおかし

診察の順番札にコネ混じる

老化する頭試してみるパズル

「産業功労賞」授与さる
順番が来たからくれる功労賞

正月に飾る優勝杯磨く

一日中坐り疲れた浴衣会

修業時代の辛らさを言わぬ坐りだこ

明^{あか}いうちに帰ると家内不審がる

新聞を読む妻の横顔が老け

数えでは人ごとでない古稀になり

朝の戸を開けると犬が待っている

誘われも誘いもせず
に遠ざかる

橋の上ぼんやり歩く
十二月

敬老の招待蹴って
ゴルフ場

一流の雰囲気コニヤック舐めながら

新聞の休み腹立つ活字見ず

巻き添えがなくてよかった事故現場

合鍵はあるが一応ノックする

エレベーターの中外人は愛想良い

筍の出る頃になると胃が痛む

急にどうと云うことはないレントゲン

時も時身代りのよう犬が病む

獣医さん気軽に往診してくれる

老衰の犬 二、三日が山と云う

今朝もまだ生きてる犬の小屋覗く

かに食いに来いと米子の得意先

昼からはプライベートがある社長

ボーナスを渡す訓示にちよつと照れ

句会から とんぼりを抜け三津寺町

M氏の追善会にて

七回忌三回忌より派手になり

次の間にボデイガードが居る会議

トルコ風呂知らぬ野暮さを笑われる

ぼくだけのオアシスコーヒ飲みに出る

ホワイトの上衣タップを踏みとなる

置かれるとこへ置かれ白磁の壺生きる

初孫の写真が僕のマスケット

せんべいなど齧り夫婦に夜が長い

老妻ののどかな顔をうらぎれぬ

坂道を追い抜いて行く白い杖

某年某月某日・某所で薫風・二三夫・形水会合

三人が亜鈍一人の酒に負け

跋

彼を語るためには私を語らねばならない。何故かと云えば、それは人間関係に於て、又川柳関係に於て、現在までの永きに亙っているからだ。彼と私との出会いは四十七年前に遡り、二十三歳の白面の独身青年であった。その頃といえは昭和の初めで、現在以上に不況下にあり、私が失業しているところを、羅紗既製服問屋を営む義兄に拾われ、経理と帳簿を任された。そこに彼が居て、「川柳雑誌」を膝の上に拵げ、ニコニコしながら私に話しかけた。それから十年、春秋に富む青年時代を共に、同じ釜の飯を食う間柄となった。それも彼の場合は、目的をもつて一年ずつ青年時代を築いていたが、私の場合は、何の目的もなく、ただ安易な毎日の生活を食うだけの一年ずつであった。併し昭和十六年の末に始まった大東亜戦争までの十年間には、互いに結婚もし、父親になったりしつつ、共に路郎師の許で川柳に勤しみながら、店から今でいうC・M雑誌「羊」を刊行し、川柳や俳句を掲載した事を覚えていた。

もともと彼は、私を知る前から川柳を手懸けている。それは彼の実兄が江戸文学に詳しく、殊に古川柳を究め、且、実兄の職場の後輩に、当時でも、京都の柳界に名を留めていた伊藤入仙とは、知友の間柄で、その影響下にあつたとすれば、五十年の柳歴は必ずしも過言ではない。

先に述べた通り、当時、川柳に対する熱の入れ方には雲泥の相異があり、元来、寡作家の彼ではあるが、早くから路郎師の目にとまって、しばしば名句鑑賞に選ばれた。その作品と、その頃の代表的な作品をここに挙げてみよう。

車窓暖かチルチルミチル顔並べ

車窓暖かここは明石のお舟がたんと

赤ちゃんが突如気持ちのよいおなら

だが私の場合は川柳は二の次でしかなく、というのも、一方私には詩壇に關係があり、そこそこ名も通っていて、それら詩人、画家、作家に足を引っぱられて、川柳どころではなかったのである。当時私は路郎師に頼まれるままに原稿も書き、大会や座談会の記録を徹夜で書いたりして、編集のお手伝いをしたけれども、句会の投句はともかく、雑誌の雑詠など、全然創作も投句もしなかった。

第二次世界大戦は、見事邦国の敗戦に終り、一億国民の空白は、あらゆる分野に広がり、ご多聞に洩れず、彼我の交友も暫く絶えて川柳どころではなかったが、彼が東区糸屋町で、現在のオーエスケーの前身、大坂商店なる個人商店を開いた昭和十四年頃で、此度の句集のトップを飾る、「足踏みをすな」の路郎師肉筆になる横額こそ、彼の事業と川柳の将来を約束したものである。私は一年足らずの軍隊生活を終えはしたが、比較的早く立ち直り、早速職域川柳（二葉川柳）に手を染めたけれども、彼は商売の復興に忙がしく、川柳にまで手が廻らなかつ

たらしい。彼が本格的に、戦前以上に川柳に関わるようになったのは、昭和三十八、九年頃からであり、方々の大小川柳会に出席しだし、現在の四階建ビルのオースケールが生まれた頃は、会社内の職域川柳を始めるまでになり、彼の句作も増え、当句集にその大半が占められている。その作品約四千句から六百余句を厳選して、ここに世に問う。寧ろ彼のキャリアからして、遅すぎても早いとはもうどう云えない。彼は自ら川柳の素人を任じ、この句集を刊行するに際しては、古稀記念という名のもとに、こころやすい商売の取引先や知人に贈る積りでいるらしく、川柳界を対象にしていないようだが、仮り染にも、半生を越える川柳経験からみて、決して柳界におめみえしても恥ずかしくない名作がちりばめられている事を私は確信する。ただ私は彼と違い、凡そ反動的な性格で、自分を誇張したりして、あくが強くハツタリをかけては、失敗したりする程ハツプニングに生きてきた男からみて、彼はあまりにも、自重に過ぎ足踏みをしないで、順風満帆に人生を送ってきたのが、川柳に投射して平凡な作風になっていなければ幸いである。

最後に私は彼から顰蹙を買うかも知れないが、彼の地位や名誉並びに、事業の成功からは凡そ遠い、彼の裸になった素朴な作品を、五句挙げて欄筆する。

思い出はみな笑つてる顔ばかり

恐い例聞いて病気が恐くなり

春の草踏みたくズツクの靴を履き

露の皮むいてる妻の手が無心
せんべいなど齧り夫婦に夜が長い

一九七八年晩春

大阪・寝屋川畔

藤
村
青
一

編集の

お手伝いをして

―古稀祝賀句会、おめでとうございます。
―句集谷町発刊、およろこび申します。

中華料理店でよく見かける「喜」という字が二つならんだあの文字、あれをなんと読むのかと訊いたことがある。すると、中国語ではなく

「ダブル・ラッキー」デス、と返ってきた。

形水さん（こういう呼び方は、まことに失礼だが、日頃は「形水さん」―「不二田クン」の間柄なので、活字だけ形水先生、形水社長では取ってつけたように、氏もくすぐったく思われるであろうから、以下形水さんと呼ばせていただく）川柳仲間と呼ぶ雅号の形水さんとは、大坂さんということである。川柳関係以外の方々へ（念のために）

「川柳塔」同人句集の時も「選句は任かせるから出しといてくれ」と、いうことだった。こんどの場合もそうである。しかし、形水さんとは「生地」も「柄」も違う。そちら様は川柳塔社の重鎮であり、オーエスケーの社長でもある。それ

にひきかえ、こっちは一介のジャーナリストの切れっ端しでしかない。だから、この大役は、きつい坂であった。

タイトルの「谷町」や「坂」は、昨夏、心齋橋筋の中村屋喫茶店でコーヒーをいただきながら、ぼくが提出したものが、その後、二転三転して「谷町」ときまったのである。「坂」なら、誰の句集になってもおかしくないが、「谷町」ともなれば、形水句集として動かぬタイトルだったとおもう。

まずぼくが選句のトップをうけたまわった。川柳塔社の路郎賞候補作や秀句鑑賞に選ばれているなかには、すでに形水さんが何年前前に発表されているのが数句発見された。創作のルールとして、これらは先人に功を譲るべきだが、氏はこれらの句を全部外してしまわれた。

最初は三百句ぐらいということだったが、句集にはポリウムということも必要であり、ムリに六百余句に、編集担当者としてお願いしたことである。

句集のサイズは別に新しくはないが、ぼくがこれまでにお手伝いをした十指に近い句集にはこの形がなかった。

紙質は波形のはいった凸凹のものにオフセット印刷、活字は楷書。川柳句集ではあまり見かけないデザインだったが、なるべく肩のこらない平凡なものにしてほしいのご注文だったのでこれはやめることにした。

戦前の谷町筋は、電車道をはさんで両側に既製の店がズラリならんでいた。市電は六銭なりで大阪市内ならどこへでも行けたものである。その頃は十五日と月末が給料日の工場が多く、谷町筋はそんな人たちが賑わったものである。十五

円も出せばバリツとした三つ揃いが買えたが、その既製服は大中小の三種ぐらいよりなかった。だから巨人型や小人型はシャツトアウトだった。

ーピヨイピヨイとうなぎを大中小にわけ 豆秋

その頃の谷町は、そんな感じの既製服だった。しかし近代谷町はその大中小にプラス・アルファがあり、誰にでもぴったり身に合う既製服・紳士服のメッカとして、昔も今も庶民に親しまれる街、谷町である。

谷町ーなんとなく川柳的な町である。その町から大坂形水さんが句集を出す。だからこそわれわれ同好の士が「待ってました」と声をかけるゆえんなのだ。

ぼくなどがこんなところで書いては、句集のマイナスになると何度もおこことわりしたが、編集後記を書くのはお前の責任だとおしつけられた。

良い材料（序文からーあとがきまで）をいただきながら、さて「仕立て上がり」はどうか？とにかく形水氏のお好みどうりに従っていきましました。

川柳塔七月号編集完了の日

不二田一三夫

あとがき

二、三年前、何人かの柳友とコーヒーを飲みながら、他の人たちの句集の話をしていた時、「私も古稀を迎えたら句集を出そうかな」と、何気なくしゃべっていたのに、今年六月六日が古稀を迎える誕生日で、もう人ごとではなくなったわけである。

亜鈍君からも愈々古稀だから、早々、句集刊行にかかつてはと、ハツパをかける電話がかかってきた。その時はまだ句集刊行など、些かおこがましい気もして、実のところ躊躇していた。

そんなとき、句集を出すなら「任せなさい」と、昨年夏ごろから云ってくれていた、川柳塔編集部の一三夫君に会い、選句、編集、一切のことを頼んだところ、彼は待っていたように、心よく引き受けてくれた。

私の戦前の「川柳雑誌」は、戦災で焼失しているので、某日、中央図書館へ行き、戦前の「川柳雑誌」を出してもらい自分の句を拾い出した。

表紙の字も懐しい「川柳雑誌」の頁を繰りながら、恩師路郎先生の、あの厳しい中にもやさしいお顔が浮かんできて、しきりに熱いものがこみあげてくるのであった。

昭和九年十一月号に一句載っているのが、最初の投句のようである。四十余年

も経っているのに、どの句にも記憶があり、一つ時を懐しい思い出に浸ったものである。

選出された句は、路郎先生の選になる「雑詠欄」からのもので、私には句の良し悪しとは別に、当時のことが彷彿と浮かんで来て、なつかしい句ばかりであった。

それらの句を「足踏をすな」（戦前の作品）というタイトルにした。「足踏をすな」は、私が独立開業した時、路郎先生から贈られた「横額」の言葉で、爾来、私は、この言葉を座右の銘としてきた。

戦後しばらく、作句から遠ざかっていた空白があつて、戦後の句は、殆んど「川柳塔」になつてからのものである。

いろいろの事情があつたにしても、埋めることのできない長いブランクがあること、今にして悔まれてしかたがない。

句集名の「谷町」は、〃谷町は丁稚車にきつい坂〃の戦前の句からヒントを得たものだが、紳士服業一筋に歩んできた私には、洋服の街、谷町は、〃わが町〃であり、いついつまでも、この街に居つづけられる願いもちよびり込めたのである。

川柳を知る以前から、家族ぐるみのお世話になり、日ごろ尊敬する川柳塔社中島生々庵主幹から、私に過ぎた温情こもる序文を戴いたこと、何よりの喜びで、ありがたく厚く御礼申しあげます。

小社が二十年来、社員の書道指導にお招きしている、書画家の新宮豊三先生

に、題字、装画を戴いて、中身に過ぎた装幀になったことを深謝申します。

畏友、藤村青一、不二田一三夫両君には、編集から選句に至るまで、大変なお世話になった。とくに、私の何もかもを知る「跋文」には胸を熱くした。

写真の板尾岳人さん、校正を手伝っていただいた谷垣史好さんにもお世話になった。ありがとう。

昭和五十三年六月六日誕生日

大 坂 形 水

「谷町」 著者 大坂形水

昭和五十三年六月六日編集着手
昭和五十三年八月二十七日発行

発行所 大阪市南区鯉谷中之町二十番地

川柳塔社

電話 06・271・3985番

振替口座 大阪・三三三六八番

印刷 吹田市天道町6-15 藤原童心社

